

あなおほづかな

もどかしの語源さぐりよ（その一）

龜井 孝

小 引

たしかに、おのれ一生をそこに貫いてきたところの専攻
といえは、やっぱりそれは日本語の歴史にはかならずぬけ
れども、しかしながらわたくしにおいてこれと言語学とは、
またそのまゝ、たがいにかみあう歯車であった。そして、い
まもしおなじ陰喩（隱喩）に訴えてさらにつゞけるならば、
この *Heimanderseifen* の関係にあつてじつさに伴れてま
わるのは、つねに日本語の探究へのいとなみの方であつ
た。まさにこのことわりとして、このことは《言語

学》の研究をわたくしがそれ自体において自己目的とし
なかつたゆえんを含意する。そしてこれはH・シュハート
がロマンズ語学など称するところのものは大学の学科の名
にすぎず、真に学問としてあるべき姿のものはおのれ一つ
たゞ言語の学のみといったその真意に矛盾しないはずであ
る。たゞ、たま／＼わたくしにとって「言語学」とは、あ
の敗戦のおかげをもつて、これも一つ、文化政策にたいす
る外国のちよつかいにこたえる大学教育のその制度いじり
のそんな瓢箪からの駒としてそれまでのつとめさきにおい
てあたらしく設けられわたくしがそこを占めることとなつ
たその講座の名であり教科目であつた。そしてここからし

てわたくしの生涯の延長線は成城大学の文藝学部に独自の

ヨーロッパ文化学科の発足とともにこゝへ引かれた。たと

え片雲のかげにさそわれてどこそいわね、いつか風狂の漂

泊はるか日本をあとにした。ヨーロッパが地理的概念で

なく歴史的概念であるかぎり、ヨーロッパの文化と言語を

めぐってもわたくしはいろ／＼のことを考えしめられた。

つねにわたくしの厭うところは、言語学の名のもとに移植

して、もってそれをおのれ《言語学》*vernachsen*に

せしめる日本の風土であった。

成城大学に暮した歳月は十年をはるか満たないもので

あったが、その間の生活の愉しかったことは退いてのちの

いまもしば／＼わたくしの口にするところとして親しい人

びとは記憶にあらたであらう。いま成城学園が創立の七

十周年を記念するにあたり、その記念日に花を添えるべ

く、こゝに『成城文藝』として特集の号を編むという。わ

たくしのさ、げるところは「あすは炬になげこまれる野の

草 (*Verum agri*)」をいえずとも、いま乞われてこゝに欣然

とふでを執るゆえんのはヨーロッパ文化学科にむかえ

られたことへの尽きぬ感謝の念にはかならない。ます／＼

彬々として文質ともに学園の繁栄あらんことを。(一九八七

陰曆陽春吉辰)

I

いまや半世紀を上廻つてむしろすでにほとんど六十年に
なん／＼とするのむかし、その頃の旧制の高等学校ではド
イツ語を第一外国語とさだめたコースを呼ぶに乙類の名を
もつてしたその文科乙類へと進んだわたくしが、すなわち
初めてこのときに手にした文法の教科書、このんですさび
の筆をそれにまつわる思い出のまに／＼ここからすすめて
ゆくのにいまえらぶこととして――。さてほかならぬそ
の思い出の教科書、それは、このごろのどれも似たりよっ
たりにうすつべらな入門の手びきとは趣きを異にし、さす
がすでにその見ごたえも、いよ／＼これからはドイツ文化
の世界へおのれじかに分け入ってゆきうべきその階梯とば
かりに心ひきしまる厚手のしたて、そも／＼たんなる使い
すての教科書にとどまらぬ、はるかに凌いでそれ自体その
ものにおいて權威をそなえた学習文法であった。その、こ
の本で、けだしそれまでに学ばしめられた外国語といえ
ばいまだなお英語たゞ一つのみ、こゝにはすでに跡をとゞ

めぬ古きゲルマニスムスのなごりのいつそなか／＼にもの
珍しくもまたなじみがたかりし手ごわさ、おもえばおのれ
来る日も来る日もこゝにひとえにとつぷりと身も心も浸ら
しめてこそあつけるものかな。

たゞ、夜空を焦がして罪なき市民に無慚の火の雨をそ、
いだアメリカ軍の襲撃のあの紅蓮の焰に舐められなかつた
ならばいまも手もとにのこつていたか知れぬものを、いま
では肝腎の書名を失念してしまつたが、しかし著者は青木
昌吉——、わたくしが東京大学の門をくぐると入れかわり
にぐらゐに定年退職した独文学科の、かれはその教授で
あつた。わたくしと同世代に属していれば、この著者の名
にみちびかれて、あゝあの本かと、さぞかしむかしのドイ
ツ語教育のすさまじさをかえつてなつかしむ人もまたある
にちがいない。もつとも、いかにちぎれ／＼の糸のみだれ
を懸つて、そゞろはかなき思い出のあやのそのほつれのつ
くろいにいまさら心をちりばめてはみようとて、じつは
書名のいま遽かにはさだかに浮ばぬそればかりか、さらに
一書の編成についてなどはきわめてばら／＼な記憶さえも
もはやおぼつかない煙霞のあなたなるを、こゝにひとつ、
それとしてはまことにとりとめもない断片ながら、これだ

けはやつぱりまざ／＼とたもたれまざつていまにあざやか
によりがえる、けだし少年の日のそのわたくしのころを
たま／＼それほどにまでいたくとらえて、もつてのちへと
つよくその刻印をとゞめるにいたつた、げにも一つのこだ
わりあり、いまわたくしは遠く遙かなその思い出をひとり
あらためてひそかに反芻する。

およそ学習文法はすぐれて実用をむねと目ざすから、た
めにわれらが教科書にも各章の最後にはそれ／＼に和文独
訳の問題が編みこまれていたことに変りはあらぬさういう
お定まりの短文のうちに、「彼は優れた論文を書きあげ
た」とかいった、まあ、とにかくそんな、それ自体として
はいわばなんのへんてつもない手のものが、すなわちまだ
ほんの初めのどこかに一つまじつていたおぼえなのである
が、じつはこゝに初学のためをおもんばかつてさらにあら
かじめ「論文」にあたるドイツ語を括弧に簇めて添えて
あつたこれだけはいまもしかと心にのこつてゐるそのドイ
ツ語にこれからはなしはかゝわる。少年のわたくしに奇
異の感をおぼえしめたことには、「論文」を訳すに、とく
に《Gesam》をもつてするよう指示されていたのであつ
た。かえりみるに、やつとひと足ふた足をふみいだしたば

かりのよち／＼、ドイツ語に固有の表現またあれこれあるべきなど、そも／＼いまだ学んでいなかった段階であるから、ドイツ語じゃ論文という意味のことをいうに英語から借りてでなければうまくにあらわせぬのかとのいぶかしみをまずそのときとしては懷いたこともたしかとおもう。

たゞしいまこゝにこれから語らんとするゆえんのは、さにあらず。エッセイという「かたかな日本語」は、これは随筆という形のそのとりすました感じの方を抑えてや、バタ／＼さくきどつていいかえるそのかぎりのほか、もはやそれ（随筆）とまったくの同意語とばかり、すでにたんに素朴にそう思いこんできて、あたかもそうきめこんでいたこの思いこみゆえに、たとえいかに傍目にはおろかしいはなしであろうとも、こゝからわたくしはいつまでもち／＼ぐなきもちへの分裂に心をゆさぶられていた――。

それゆえにしかしながら、いわばこの後遺症のその手あととして、やがてまたわたくしは、この「随筆」ということばこそ、これまさに明治の人びとのところにはいまだ伝統の意識にこたえるゆかしい内容のうづわとして、じつは論文の――もしすでに今様の文化のパラダイムに移して理解してしまうかぎり――このふくみをそこにさながらたち

きりがたくこめていたものなるべしと、そしてさらにはだから、こそとばかりに、かたや表現のあやからみた「随筆」から解釈のその独自の展開が腕のみせどころとなるべき、すなわち内容のがわからみた「論文」への（essay）の、この、その《意味の流動》、かたや異質の風土へ移植された借用語そのもののその運命の歴史のこの現実の様相、いやしくもこの二面をこも／＼ふまえて日本語の（随筆）のそのふくみをせい／＼あなたさまにつめてみるこの正統のせまりかたなどいっそどつこいおのれそこ退けのけだし一足跳び、かつて日本がはじめて（essay）の語を学んだとき、けつきよくひとはいちばんにそぐわしい民族衣装としてためらうところなく（随筆）へさつと着せかえをとげたまでののだと、いつの日からかこの「どう／＼めぐり（または *petitio principii*）」のいたずらに、思えばうか／＼とみずからをあざむいてごまかしてきた――。

ここからさらに、これも身がつてな論理をたゝんで、それでまた押してゆくならば、狭義の学者たちをそこにふくめての、ひろく文人と一括しうべきそれら江戸時代のいわゆる文人たちは、かの幕藩体制のもと、ヨーロッパのフマニストたちのように自覚形態としての人文主義のこの理想

をそれ自体においてみずからに育まず、とかく斜にいなしたその生活感情からこのんで「随筆」をものし、もっているに多くの随筆集をのこしているこの歴史の個性にかんがみ、いま江戸時代をば、ひとつころみに随筆文化の時代としぼってみることも、またできるであろう。このばあいの随筆とは、その内実において、その本質において、なか／＼にこんにちいわれる「ズイヒツ」とことほどさように単純にはあい蔽わず、ただ非体系的なその見てくれにすであからさまなようにそれだけおのずからにまた心ゆたかに自由なあそびの精神にねざす、むしろこのふくみ、そのかぎりにおけるかれこれの《「雑」文》、もしこれをほしいままに逆によこもじに翻^フするならば、いきおいこれは miscellaneous papers あるいは vermischte Schriften などとするがそぐわしかるべきものか。（とにかく英語の paper にせよ、ドイツ語の Schitte にせよ、しかるべき文脈においてそれが「論作」を意味することだけはあきらかである。）

もとよりヨーロッパとその外の世界の日本、これら独自の文化圏、あい異なる精神の風土に育まれたそれ／＼の時代と社会の理念のその個性の濃密さを象徴すべき文化の形態論として、ないしはそれ（文化の形態）のその類型論と

して、こゝから歴史の景観のその本質に精神史の浮き彫りをこゝろみんとするたくみのごときは、おのれいまあえてこれをこととしうるのかぎりにてはさらにないけれども、たゞ、ここに到り、いまやひとついわせてもらうならば、海を越えた韓国や中国のこのよそさまの「国語学」の世界についてはいざ知らず、われらお膝もと、日本のその《土俗の「国語学」》には、これまでのにのべきたつたその文脈における眞に優れた《「雑文」としての随筆》に乏しく、やつとさきごろ久しぶりにそれに恵まれるの幸せに浴した。いわく、佐竹昭広著わすところのその名も「古語雑談」。古代から近世までを歩はゞこまかく股にかけたユニークな学殖のその深みからそゞろにばらまかれる珠玉のきらめきは、すべての読む者を魅了しさつてやまぬであろう。おのれ心情のそのまゝをさらに吐露するにまたいとわぬならば、おかげをもつて閑雅無涯の世界へわれから気まゝにあそばしめられつゝ、かつておぼえなきまで心たゞに痴れに痴れて読みふけたというべし。（わたくしにとつては学問のたましいに培うこよなき請待、今様にいゝかえれば、すなわちエンタテインメントであつたのである。）

しかしいま、わたくしは、この書にその紹介のふでを執

ろうとする者ではさらにない。たゞ心にく、も開卷一番、まず『古語雜談』への幕明けに擬した「はなし（咄）」、このことばをめぐるいくつかのくだりのうち、その二つのくだりをつぎに書きだすことに著者のゆるしを乞いたい。けれどしこれをもって著者がみごとに抑制をこころずからに利かしているそのうるわしいスタイル——そういうのは、こびの精神のスタイル——の一端にみんなひとしくじかに觸れるのまさにこのよすがたにと、おのれたゞにそれをねがうのみ。おのずからにあきらかなるべきも、つぎは、まず一書の、けだしそのはじまりの書きだし。

1 はなし

古語について雑談をすることは、古語について「はなし」をするということである。少なくとも「はなし」という語のものと意味に即していえば、そういうことになる。「はなし」ということはが文献の上に現われはじめる時代は意外に新しく、室町時代の末頃からであるが、『天正十七年本節用集』に、「咄雜談」という説明がついている通り、用法はかなり後までこの意味を失わな

い。
ちなみに、このあと江戸時代初期の俳諧の撰集『鷹筑

波』から「春のものとて遊ぶ人々」「起きもせず寝もせず夜半にするはなし」の付合（つけあ）を掲げてさらにここから話題はいろ／＼と展開してゆくが、それら具体のすがたについてはすでに原著そのものに就かれない。

つぎに、もう一条。この方は、そこに述べられた趣旨のその重みゆえに、せつかく一段すべてを引用する。

4 話と放し

「冗談」という語は「雑談」から発生したという説を出したのは柳田国男であった（『不幸なる芸術』）。発音も意味もよく似ているところが魅力的であるが、両者の関係を立証することは容易ではない。同様の困難は「話」の語源（傍点引用者）についてもある。「放し」に結びつける説がそれである。

古書には「話」「話す」などに対して「放」という字をあてた例もたしかにあるし、口から出まかせの「咄」は、意味的にも「放し」と関連がありそうだという印象は捨てがたい。しかし、同音異義語を、もと同一語と認定するには、異義派生の現場を抑えなくてはならない。「放し」「放す」の用法と意味の変遷を歴史的に検討し、これがどのような経路を通過して「話」「話す」の意を担

うようになってゆくか、意味変化の分岐点が確実に突き止められてはじめて、「放し」と「話」はもと同一語だったと認められることになる。

もはや以上、これだけを言うのみにとどめるの著者が、すなわち佐竹昭広の人格は、いたずらな思いつきやあてずっぽうのこじつけをおのれ臆するところなくふりかぶるたぐいの、さらにいえば鬼面なんとやら、まことこのけおどしゆえのえせの「学者語源」、つまりはこれまた、いつそあたねばこそそのやまかん八卦、それだけにそれをもどきあげつらうには労のみあからさまに多かるべきいやはやはた迷惑のその放埒、このような境涯にたゞうかうと身をおぼらしめるがごとき気質には——くりかえしいう、かれの人格は——はるか遠く属さぬことをここに重ねておのれ強調しておきたい。

こゝに語の意味のその推移のすがたのある一つのパターンをあらわにとくべく、もとより本質的にはいずれの例にうつたえるもそれなりのしかるべしさをそれ自体において失うまじきこのかぎり、ひとつ例を「法を説く」など、いまこのようなばあいのトクにえらぶならば、これもけつきよくもとを洗えば「紐を解く」「包みを解く」の、この

たぐいの文脈においてならホドクへの置き替えをこゝに慣用が容認すべき、へむすんだ、この完了態においてさながら結ばれたまゝに目のまえにある所与、すなわちふた、びそれをもとのすがたにほぐしてもどすいとなみをそれとしてあらわすゆえんの、このトクの本来その「転用」(Metonymy)または「陰喩(隱喩)」とそう見なして疑いの余地なかるべく、さればいままたこのことば(ターム)にてらしてまさに一語のその多義への展開とそれ自体におけるこの拡充——たとえば紐をほどくのは包みをほどかんがためのいとなみとして、それではひとはなんのために包みをほどかんとするのか、けだしなかみあつてこそそのそと包ぞ——から同音の異義への流動と飛躍、移行と分裂をもしのでむならばさらにそれなりに——すなわちまたたとえば、ときがたくむすばれた糸のこの象徴のタームズにおいて陰喩のこころをとらえるの線からも——きめこまやかにこゝにそれとしてまさしくとさうべきである。したがってまたそのかぎりは、この解釈学的志向にたいしけつしてわれわれとても原理的に臆病なつもりはない。たゞいまこゝは、それ自体としての「解釈学」の方法をそれ(解釈学)自体のためにかれこれあげつらうばしよではどのみちない

から、いさぎよくそれはそれとして、ここにむしろわたくしとしては、いつそ咄というこの字につき、ねがわくはしばらくいささかのことをば伸べしめられんことを。

II

そもそも咄というこの漢字そのものならば、この字体の漢字ならば、鹿を中原に逐つて覇をとなえたシナ歴代それ／＼の王朝のその韻書から、降つては清朝の康熙字典を経てさらに満洲族の清朝を仆して生れた中華民国およびそれにつゞく中華人民共和国のこの中国のもろ／＼の字典類にいたるまでいずれもおのれしかるべくずつと登録しきたるところにてあるべきこと、いまさらあえてこゝに原據に訴つて一々じかに徴するはあえてこれを須いざるべく、もとよりそのかぎりにおけるこの字がハナシの訓を施しうべき意味をついにそこにやどさぬこと、このこともこれとしてこれまたすでに経験的にあからさま、さればこそ、漢字の自家のあちらさまとしてはなんらご存じなき、かつていささかもあずかり知らざる、すなわち、そんな、はなし、というこの意味、これに対応しておのれ独自にハナシの「よ

み(和訓)〃をそのいのちとするわが日本でのこの咄の字、これは、じつはすでに佐竹がなに食わぬ顔でほめかしているところをふまえてパラフレイズするならば、《はなし》とは「口から出まかせの」内容のそのおしゃべり、すなわちもと／＼はそういう improvisation、それを「本字」に擬して目に訴えるべくたくんだ、すなわちいわゆる「國字」にすぎぬのではないか。つまりたとえばコガラシに困、ナギに風、トウゲに峠、センズリに持、あるいはカシキに門、ツカエルに間、ソマに柚、カセに棒となど、じつは手あたり放題これら他にも古来その例さらにいささかも珍しからぬ、これら《日本流の「会意」》のでつちあげの慣用とそれ(ハナシと訓ませる咄)と、あえてここにえらぶところはないものと、けだしそう見て一向にまたよろしいのではなからうか――。

そうはいうものの、やはり咄のばあいには、ことほどさようにそれでする／＼とそのまゝ、一すじなわにはまいりかねるのふしあるも、これまたすでに確かにて、さればせつかくひとつまずそのふくみにおいて、これからののはこびにいまあたかもつつかい棒さながらに恰好の力ぞえをばいたしうべき、まあ、なかでもそれ自体におけるうつつけ

の、そんな傍例の方に一つさきに觸れることとするならば、すなわちそれは助詞バカリにま^す、目の単位^の、そしてまたそれ自体としてマスの訓をもつ、その斗の字をあてがうところの、この慣用である。この慣用がいまだ二十世紀もついでさきごろにまでずっと生きてきていたその長い歴史をどこまでも溯つて、すなわち通時のながれを沿つてそのタームズにおいて洗うことは、さしあたりこの本質にかゝわるところなきペダンテリーに属すべしと、すでにいまはこれを考慮のそとへしりぞけ、そのかぎりにてすなわち「慣用」の確立そのものをその完了態においてせいぜい一氣にここに蔽うならば、いわく、もとバカリの斗は、たとえば「粟一斗」(この例、太平記卷一より)などを使うこの本来の斗の字へ計の字が「癒着」をとげてしまつたものにほかならぬ――。

のぞむところの例がこれのばあいにはちよつとあたればむしろどこにも見いでうというこのふくみからは、いっそ手あたり次第こそそのあかしにもよろしかるべけれ、すなわちすこしくなにくれと、たとえば古い日記なり記録のたぐいにじかに手をよごしてみるならば、それに筆を執つたご当人がどんな意識をもつて書記のいとなみにのぞんだ

かにつき、かりにそれはべつに一樣にはあらずとするも、草体にくずして一筆^{ひとすぢ}に運ばれているそのかぎりの斗字を、草体そのまゝ、それ自体において、もと／＼の斗字のその草体か、それとも計字をやつしたそのなれのはてのこの慣用のマニフェステーション(あらわれ)かにつき、その外形のみからではまったく区別を認めえぬ具体の用例、まさにこれ勝て数うべからずというも、なんらここにまた誇張ではないのである。

つぎに、いま見るような「癒着」のタームズにおいておなじく語りうるそのかぎりにおいて、たゞしその具体の相においてはむしろ斗字のばあいほどにまでは目た、しからぬをおのずからにその身上とすべきか――の例を、これもひとつ、思いつくまゝにさらに加えるならば、わたくしとしては、つくりの車をふでのおもむく勢いとして東の行草体にあやからしめた陣の字をこゝにえらびたい、いまアカデミックに古文獻からその徴証をつぶさにかゝげるのわざは、それが容易なるがゆえにこれをこゝにいうこととするも――。

もとよりバカリのばあいにおいても、ひろく世俗に一般に斗の字をもちいるところのこの現実^{じじつ}は、さりとてそれで

ここから原形の計をバカリにもちいる習慣の、それがそれ自体としてすたれたことをいささかも、に意味しないけれども、この点について陣のばあいにはこれをたま／＼楷書の陳にすりかえてこのスタイルでゆく例まではこれを目にすることがげんにあつても、斗にバカリの訓が定着してしまつて、ケイスのような、《そう、い、う、完了》のふくみでの完全な「癒着」はまた、おのずからにことのことわりのそのおもむくところ、こゝからしてはそも／＼よみとりがたい。

もともと病理の現象に言及するための新鑄としての「癒着」の、この《（原義にたいするなぞりとしての）翻訳借用（*Lehnprägung*）たるネオ漢語》の、その背景には、ドイツ語の《*Verwachsen*》の形が揺曳する。すなわち、およそ「癒着（する）」とは、その原義において、ものがとにかく *ver-* に *wachsen* するこのおぼめかしきこゝろをふまえつ、とうぜん文字どおりにはもと／＼きずぐちがたがたいにくつつきあつて一つにふさがることとをひとえに意味すべき、この「癒着」を、しかしながらわたくしは文字（かなにたいする「本字」）の現象のうえに陰喩的に援用したわけであるが、ここに文字に独自のなその癒着のおこりうる《環境の

「偶然」は、とうぜんながら一様ではありえない。かりに、いま陣のばあいには、その背景に字音が「癒着」へのあるさゝえとなつてゐるにしても、意味のがわから癒着うながしおしすゝめる、この強いちからは、ここには活らいてこない。たゞしその本質に即して他面おしなべていえば、いやしくもそれ自体としてこのように「癒着」の名において抽象しうべき特異な現象が日本という漢字の自治領にここに独自におこりうるのは、すでにじつさいの表現におけるそのながれとしての文脈がそれ／＼のばあいにおける当該の文字のそのヨミ方、そこではまさにそれがそれであつてそれ以外ではありえないそのヨミ方（排他のタームズにおけるその《意味》の選択）について、可能性のタームズにおいて陰在的にはここに考えうるところの混乱を顕在的に現実にはおのずからに（必然的に）防いでしまつてくれているからである。それ／＼に適切な手なおしを個別のケイスに応じてほどこすかぎり、その本質において斗字のばあいにももとよりまた、その点（未然に「混乱」の防がれうる点）、なんらほかとえらぶところはない。

むしろこゝにいつておきたいゆえんのは、もつぱら字形それ自体におけるなんらかの類似そののみがそのきつ

かけとなつて——すなわち、ヨミ（和訓）なりオンなりに
は、およそそのヨミ方には、直接になんらかゝわるところ
なく——ひきおこされたといふべき、そのかぎりでの単
純な“牽引”である。そして、これも、すでにそれがひき
おこされてしまつてゐるそのかぎりにおいては、この完了
態において、やはり社会的に既成の所与としてのそれ自体
における“混同”である。いまそれとの区別において、ロ
ーマ字などの文字体系のこれらの世界のその内部にあつて
はおよそ想到しがたきそのような《文字の動態》の、特異
な様相を把握するためにわざ／＼こゝに癒着といふことば
（ターム）をえらびそれ独自の本質をこれに帰せしめようと
するそのかぎり、たとえば断と析とのあいだにみるたんに
字形レヴェルでのその区別の紛乱は、それを癒着とわたく
しとして峻別する線をまもることに付言する。

ついでをもつて、じつはほかならぬ両字の“紛乱”がい
わば不幸にもげんにたま／＼おこつてしまつてゐるあたか
もそのなまの様相そのものにおのれせつかくにまたこの
で“雑談”のふでをさらにおよぼすのほしいまをここに
ひとえに恕せらるゝならば、すなわち天草本平家物語（巻
四、第二十六）に「千里の道を遠しとせず、ラウダン

（*loden*）の支度にも及ばず」というくだりがあるが、こゝ
に片かなとその原姿のローマ字をもつて示すそのまゝで
は、これはなんともよみとき様なきまさにテクストの欠陥
だつたのである。しかしながら、この、なんと翻字すべき
か、にわかにはそのすべ知らぬ当該の個所も、もし古写の
諸本にこれを質すの労を怠らぬならば、それに対応する漢
字いずれも粮析とある。析ならば、これは、日ごろすこし
く中世の写本のたぐいにじかに目をさらしているともがら
にとつてはすでになじみあさからぬ料の別体である。思ひ
きや、はからずも天草本の本文のこゝに解しがたきは、
いっそ古人の、その、料字へ同定すべきゆえんのものを断
字によみあやまてるにこそ由来すべきかンめるを。（翻字本
付録、札記Ⅲノ63参照。）どうみたところが断字をやつした
草体としかふみえない姿が料字を期待する位置に現れる例
にもさらにここについてながらに言及しておくならば、キ
リシタン板の落葉集に「料理」をそうはよみえない形に印
刷している。（色葉字集の部、「しつらふ」の訓をとまう
当該の目を参照。）

それでは、はたして咄の字が癒着のタームズにおいてい
かなる様相を呈するか——。これについては、せつかくま

ず「生きた」实例そのものを示すところから始めよう。

室町時代にひろく行われたとおぼしい禅林の読みもののその一つとして、その抄の写本のこんにちに伝存するものまたかならずしも少しとしない江湖風月集は、こゝに「橘洲塔」と題する編者自身の頌^{ジュ}をも収めるが、この七絶の起承の二句、すなわちつぎのごとし。

月沈野水光明蔵 蘭吐春山古佛心

すでに寛永期にくだとその衰勢いぢるしき活字板印刷からこの衰勢をみちびいておのれそれに交替した整板のその隆昌にかけて、ここに優れて支配的な指導力を一貫してたもち、すなわち杉田良庵など、おそらく当時もつとも強力な競争あいてなりしなるべき人物をもすべてまたはるかに凌ぐの概をもつて映る第一人者は、たれの眼にも疑いなく豊雪斎中野道伴であろうが、せっかく世に布くべくテクストとしていまだしかるべき底本の得られざりしにや、こゝ江湖風月集の抄には、さきだつ活字の開板ついになかりしものとおぼしく、寛永癸酉孟春穀旦梓行の刊記をもつ中野板をもつてわずかに整板の嚆矢とする。(ただしこれは厳密には新編江湖風月集略註の抄というべし。しかしながら外題および各葉の柱には簡要をむねとし江湖集抄の称を

専らとする。)さて、いまあえてこゝにカナ抄の印刷の盛行にかながみて怪しむらくは江湖風月集の抄の上木の顕著におくれていること、——すなわちこゝに筆を弄するは、しかしながら他でもない、「蘭吐春山」のこの吐字を中野板には咄に作つてしかもハクの訓を施すからである。しかしながら抄に見るところはしからず、

蘭ノ春山ニ香ヲ吐、タコソ橘洲古佛ノ心ヨ（巻三、一ウ）と。(傍点引用者)

たとえば中華若木詩抄のばあいには、おのれ道伴として「新栞（新刊）」とうたっただけのその氣負にこたえるものをそこにそれとして窺わしむるところまた見いでぬにはあらぬにひきかえ、いま江湖風月集のばあいにはその底本の選定にやはりや、難ありとすべく、テクストとしてそこを讀むかぎり、もと底本にありし脱文をそのまゝ襲つたとおぼしき個所にさえでくわさぬではない。しかしながらそれはそれとして、いまこゝには咄字と吐字とにかかわるもつぱらこの不統一、いな、むしろいゝうべくんば自由な流用、これがかえつて語学の徒には好適の資料として興味をそゝるのである。けだしすでにこゝにはテクストのことは、もはや正面きつては、すなわち、むしろ本質的には、

レレヴァントでなく、こゝは、中野板がおのれ直接に依拠したその底本にハク（吐）の意として用いてあるその咄をそのままにうけいれているところに――そのようにむしろ見うべきところに――、すなわちそのレレヴァンシーにかゝわる。こゝをもつてわれわれは、つとに吐字が咄の字にまで生長をとげたその結果としてこゝに“癒着”をひきおこしてしまつてゐる、そういう通時の事件を江湖風月集の事例の背景にすでにこゝのすじとして仮定しようとするものである。

まず吐が咄へと癒着をとげるその可能な下地としては、たしかにそれら草体において吐と咄とのあいだに微妙なところがある。そもく土には、すでにこの楷書体において、その最後の一画、すなわちいわばよこ棒のこの一、さらに“とどめ”の一点をぐつとくわえるそういう書きざまがそれを添えない現行の形とひさしくならび行われてきている。この四画の、いな厳密に言えば、むしろ現実にはおゝむねえせ四画の、その草体の土を、ふでのはこびの律動のまに／＼さら／＼とながしてとじめると、それは草にやつしたばあいの出字のその最後と、このかぎりにおいてはそのこにたがいの区別をうしなってしまう。もし扁の口か

らつく、りの出への連続のその縷々たる一筆においてさらにすこしくそこに“筆のスリップ”がおこると、もはやそれはまる／＼出そのものとしてさながらそれ自体においてそのまゝ土に同定しうる形となる。すなわちもはや吐と咄との区別そのものがここには文字の相貌において認めがたくなる。（ちなみに出字のくずしには、たての棒にひらがなのろに似た運筆をからめて、そのあと、どつぷりとみぎのそとへ点をほどこす体もこれまたあいならんで一般であるが、これは当面にとつてレレヴァントにあらず。おなじく一言しておくならば、土字についても最後の一点をみぎの肩にあたかも去声の点発のように打つ四画の体、これまた、その実例すこしも珍らしからず。）

たゞし以上だけではいまだ癒着にかゝわりなき、どのみちたんに字形レヴェルでの混同にとどまること、あらためて説くまでもない。しかしながら、かりに癒着のタームズにおいて、もつて癒着に至るまえの段階にさかのぼるならば、むしろ思いもおよばぬまで、“きずの根”はふかくもつれているのである。じつはひとつ、なまかなことではどうにも手に負えぬ、そういう始末にわるいした、かな所与がこゝにある。とりあえず生のまゝにそれをしめすなら

ば、あからさまに咄にハナスのかなづけを施してこれに雑談と注をくわえるところの、この天正十七年本節用集に見る例は、おそらく佐竹昭広としてかれのものとめえたその最もふるい徴証に属するものとおぼしいが、ここに古本節用集の一種、黒本^{くろもと}本にあつては、これがハクのかなをともなつた吐字にかわる。しかしながら、注に雑談とあるかぎり、この吐字も、その項目そのもののインテグリティにおいては他の節用集の咄字と互に同定しうべきであろう。それだけに、なまじいにこのくせものにたゞちに素手でまづこうから立ちむかうことは、すでにまたあやうい。

そも／＼吐字にはイダスの訓がある。ことばを音として、口にのぼせることをものがたるくだりにこれを用いていちじるしい。たゞさんねんながら不敏にして吐字にたいするイダスの訓がいかに慣用として定着して、そして年代的にのち／＼まで生きていたか、これについていまわたくしには知りうるところ甚だ乏しい。しかしながら、どのみち吐と咄とのあいだがらは、つぶさにことの実相にふれることはもう少しさきにゆずるとして、やっぱり微妙なのである。それはある、一つの音象徴の形態を写すべくたくまれたその仮借の——いな、仮借と見まがうまでの、しかしな

がらそのようにひとがもしはぐらかされてしまふならば、やはりそういう微妙なことがそれ自体において起りうるゆえんのものをそれがそれ自体として必然的にうちにやどすべき、かゝる——慣用にすぐれてあらわなのである。

いま六義のことばをもつてするならば、『記号の記号』の体系として漢字がおのれ構造的に卓立するゆえんのそのユニークさは、その發達の歴史において「形声」（「諸声」）のこの方法を漢字のくみたてのその中核の原理としてみずからに確立し、もつてそれを際限なきまでに活用したところに帰するといつてよろしかるべきが、ここに口扁はまた他とその類をおなじくしない特異な独自の性格（機能）をそなえている。もとより目扁が視覚にかゝわることばを、耳扁もなかならず聴覚にかゝわるべきことばを、それぞれに漢字に再記号化せしめてうつしだすゆえんのこの「形声」によるインテグレイションは、またそれなりの形をとつて口扁の字と口そのものはたらきとのあいだにもひとしく認めうるにはちがいないけれども、あらかじめひとつ否定のことばにおいてまず押えておくならば、すくなくとも口扁は味覚の表現にはまったくあずからない。（ちなみに舌を扁とする形声文字は舐字の例をのぞいて無にひと

しい。)こは口扁の“ふるまい”を正面にすえ、それをそれ自体においてくりひろげて示すのばしよではないけれども、しかしながらこゝに集約的にいゝうるかぎりのこととして口扁のばあい、ある形の字を“つゝくり(音符)”としてそれに口を扁とするとき、おのれこゝに口扁のその機能は、音符を音のための音のその代表に有縁化するところにある。(たとへば、「啐啄」にしてからが、二字ともにもとは“写音”)よ、その言語にまでこの線をおし及ぼす試みをあえてすることによっていつそ口扁の機能としてそこに考へうるその眞にふかい本質をばわれから漏らすゆえんの極端な事例は、たとへば、個々のばあいでは、ここに喇嘛や咖啡の例をも属せしめうるが、なかんずくそれは、漢訳佛典の陀羅尼にたいしもつばらこゝ、陀羅尼のために案出されていちじるしいそれら“音訳字”である。けだし一言をもつて蔽へば、それ(音訳字)はすでにその機能において“メタ漢字”と見なしうる。さらにいゝ、かえるならば、すなわちまたそういう注音字母である。

かゝる音訳字の援用は日本においてもこれをこゝろみざりしにはあらぬが、いまにしてこれを見るならば、それがペダンテリーのいたずらへとむしろおとしめらるべきわざ

なるは、それ(音訳字)のあらわれる文献のもつばら日本書紀にかぎられることをもつてしてすでにそのまゝにあらさまであらう。けだし、たとへば日本語のラヤリの音を写さんには、こゝに羅や利の字をその仮借に援用すればすでに十分である。なんぞ口扁をさらに加えたる字をもちいるの要あらん。(たゞし誤解をさけるためにやはりペダンテリーとして言っておくならば、古代日本における識字階層の人びとが、たんなる仮借としての多字や羅字にあえてさらに口扁をくわえるとき、これはそれが既成の仮借であることをやめる、そういう否定の、いいかえればそういう負^{マイナス}の価値を帯びしめられた diacritical mark としてそこに機能するこの認識をそれとしてもたぬまゝにとゞまつたことを意味しない。)

しかしながら、もとよりその原則においてすでに“音訳”の実践は既成の文字のその仮借に訴えるのが伝統であり、確立された仮借の權威はけつして音訳字のこの異端の勢力にその新鑄を放埒にペダンテイクにゆるすことなどしていいない。現実に口扁の形声文字がかゝわるところのその活動の舞台は、なかんずく“写声”および“写響”、もししからずんばその陰喩としての生命を共感覚(Synasthesie)の

心理に根ざすべき「音象徴」にかぎられると、そういつて大過ないであろう。(たゞし音訳字のタームズにおいてなら、すでに言扁と口扁との対立をもつて古代の漢民族はマルチネがいわゆる二重分節のそれ／＼のレヴェルをも直観的にしかしましたそれなりにさだかにさらに区別しえていたといゝえぬではない。)

笑い方の形容に「ハット」(じつさいのマニフェステイションとしてはバットやパットであつたものと思われる)のほか「ドット」があつて、これを慣用として「吐咲(吐笑)」とする例の古くに見えることはおそらくすでにひとの気づいているところであろう。土の字を濁音にドとよむ慣用がどこまで遠く浜りうるかはいまだこれを明らかにしえていないけれども、「吐咲」のばあいの吐は、はくという意味をもつ「本字」にいわば民衆語源ふうな解釈を、つまりは、まあ、そういう奔放に自由な「生きた」解釈をもちこんで、ドというこの《音のための音の代表を目標とした「仮借」》へとこれを日本においてふりかえたそういう慣用の「あて字」だつたのではなからうか。(たゞし厳密にいえば、笑いの形容のバットやドットそれ自体は、もとより直接に「写音」や「写声」の形ではなく、すでにこれ

だけいえばあからさまなるべきも、音象徴の一種にほかならぬ。しかしながら、この日本語の音象徴のために吐の字が「仮借」として援用されたゆえんのは、《土を音符とするところの、すなわち口扁に独自の形声文字》にこれを擬する、この古代人なりの——たとえことの論理においては誤謬を犯した拡大解釈であらうとも——ひとつこゝにやはり注目すべき解釈である。)

いま暗黙のうちに仮借としてドットに吐字の用いられるにいたつたということは、しかしながら、ドットにあてる字がこれ一つにかぎられたことを意味しない。それからまた、いやしくもその「資格」を仮借にもとづくあて字であるとするかぎり、このことは、そのような「定義ゆえに」他面それが國字であることをこゝに意味しえない。まず初めの方について具体的に示すならば、古本の節用集のうちにはおなじ「ドットワラウ」を「咄笑」として掲げる本ばかりでなく、「暖笑」として出すものを見る。この後者についてはいわばある矛盾がたちどころにあらわである。まず第一には、それはどうみても、「バットワラウ」に対応すべきものと推す方がことのすじであろう。なぜならば、バットだつたらその字を形声文字と見なしうるであ

ろうからである。しかしながら、そう見ようとするかぎり困ったことには、じつはこんな字は本来の漢字としては存在しないのである。そしてそれはやそうとなれば、これは日本語の音象徴のためにたくみいだされた「えせ漢字」とおとしめられてもそれなりにはまたやむを得ぬところとなる。しかしながらまた、たとえそれがえせ漢字とおとしめれることをまぬかれがたきものであるにもせよ、そのようなさだめをみずからに背負いつ、やはりこの字がおのれ現実の姿をまつて生みいだされたについては、おのずからまたこゝにその運命の糸を主体的にあやつたゆえんの、その、日本における漢字それ自体におけるそれ自体としての、ある歴史は、すなわち、ある歴史が、あるはずである。たま／＼これは嘉永摹刻の大塔物語にみる例であるが、「發引退^{ハツト}」(また「發崩^{ハツト}引退^{ハツト}」とも)のようなばあいのこの發の字ならば、この機能はれっきとした仮借に帰せしめうるにひきかえ、呪となるとこれはなか／＼にペダンティックにたくまれているものと解される。いまだ遽かにじつさいの生きた用例をさがしだすにそのいとまなければ、べんぎいま節用集の諸本にちよつとあたつてみるならば、その一本に「跋立(バツトタツ)」「跋落(バツトヲツ

ル)」の慣用を見るが、もとよりこのばあいの跋ならば、これはそのまゝに字音の仮借である。ここからして、そも／＼すでに口扁の機能を直観的にとらえていた有識の一人は、足の字のあたまだけをのこして口扁の字をでつちあげるの藝当もやす／＼とやつてのけえたものであらう。このえせ漢字をひとはさらにドットに転用した――。

ふでをはこぶにいまいさ、か擬人化の修辭をもつてするの線をこゝにいとわぬならば、文字もこのように生きていたのである。いな、このように生きている文字たちのその生態にことはかゝわる。もし必要な変更をくわえるならば、たとえば副詞キツに「屹^{キツ}(ト)」をあてる例と「屹^{キツ}(ト)」をあてる例とがたがいにくらぶところなく一つのテクストのうちにかれこれとあらわれるとき、ここにおいてもこの本質は跋字のばあいにそのまゝ、インテグレイトせしめられる。うらかえしていえば、キツのばあいにも、すでにそこに屹字がそれ自体において漢字としてあるということは、こゝにもはやレレヴァントでないのである。そして、このイレレヴァンシーは、およそ当該の字がえせ漢字であるかどうかにはすでに、この本質においてイレレヴァントであるゆえんの、じつはこゝから派生すべき系

(corollary) にすぎない。いまドットに戻つてさらにひとことをくわえるならば、運歩色葉集には、ひとつまた「噴笑」の例をか、けている。これは、こんな『漢字』が漢字そのものとしてはありえずとも、ドットという日本語のこの音象徴の表現としてはこのような慣用が、すなわち口扁に童を書くところの慣用もまた、それとしてそれなりにありえたことをやはりものがたるものとすべきである。もしこゝにそれ自体において考うべきことがありとするならば、ことはこれらえせ漢字のそのいわば『えせ漢字性』に係るわけであるが、しかしながら、もとよりこゝ、はもはやそれをそれ自体のために正面切つて論ずるばしではまだありえない。

こゝに別途こゝろにとむべきは、そも／＼バットにせよドットにせよ、これらいずれも、たとえそれ自体としてこれらは音象徴の形であつても、どのみちそのかぎりにおいてまたひとしく日本語にはかならぬ以上、それらは漢字にとつてとうぜんオンでなくクンにはかならぬということである。そしてそう見るからこそこのすじとしていなみたいたいとするれば、まさに吐字のドットにおいてこの点はます／＼切実である。けだしそれは吐字にとって、まことに相

性のいゝクンである。もとよりことわりのおもむくところ、または定義上、クンは、それ自体においては仮借ではありえない。ただ、もしいいうべくんば、なかならず当面のばあいにおいてそれは、すなわちたとえバットは、どのみちやつぱりそれ自身における肆意の記号に単純には対応せぬゆえんのものとして『象徴訓』である。そしてまさにこゝに陥しあながそれ自体において隠されている。過去の日本人が漢字にいどんで奔放にこゝろみた文化の自己実験はげにも多彩にユニークであるけれども、象徴訓はそれがそれ自体において音のための『音もどき』、したがって漢字の音韻論的性格 (Characteristik) にかんがみるならば、すなわちまた quasi-ness ないしは『オンもどき』であるこの特異性をもつてひとをはぐらかす。(このような文脈、すなわち象徴訓の文脈において、もはやそれがいつそオンか、はたまたオンもどきか、そのけじめさえそれとしてさだかならぬ、いいかえれば境界線上を飄蕩する例としては『颯と』におけるサツ(ト)がうつつけであらう。そして、いまわざ／＼この颯字のばあいにこゝに言及するゆえんは、この特異な例が『オンもどき』のこの歴史的性格を象徴的にうかゞわしめてくれると思うからである。)

さて暖字のばあいとことなり、『オンもどきのクン』として、そのかぎりのクン、すなわちドットをおのれ咄字がその身に具えるに至ったその経緯は、すでに癒着のタームズにおいておのずからに期待しうるところである。咄字について残るところの問題は、ハナシの訓にかゝる。しかしながら、口から出るにまかせ、すなわち improvise するのをその身上とするへはなしを、いな、その能記たるハナシの形を、そのまゝ、そっくりそれ自体において視覚のレヴェルへ再記号化すること要求にこたえてこゝにえらばれた漢字がほかならぬ咄字であつたしかるべしさについて、もはやこゝに縷々つらねるまでの要はあるまい。もはや咄字のばあいにも、いな、なかならずこのばあいには、もとを洗えば『由緒』たゞしかるべきその出自など、すでにどうでもいい、すなわちイレレヴァントだったものに思われる。この字のばあいにおいては、そのつくりゆえに、いわば廂を借して、ためにその機能においてまったくの國字に転落をとげてしまったのである。そして、たとえばわざ／＼口扁に息と書いてウタと空を書いてウソとよましめるがごときやくざな字はすでにかゝる淵から生れいでたはかなきあだ花であつたとすれば、かゝる『あだ花文化』の

土壤に培うべくさらにまた必ずしも縁なきにあらざりつべし咄字のさだめ、さりとて数寄のきわみともいうべし。

たゞ相対年代のタームズにおいて派つておさえるならば、吐字がいつそう表現性のゆたかな咄字へと癒着をとげたその段階で、かたや語としては別途またそれ自体として立派に自己確立をとげおせていたハナシの形が識字階層の人びとのその文字化への欲求のまに／＼いっそかみしもを脱いだ咄字をこのんで、もってここへみずからを定着せしめたものとすべきかぎり、どのみちことの順序として文字の歴史そのものは語史の解明にたいし無力である。とはいへこゝに一つの逆説を弄することはできるかも知れない。すなわちハナシのばあいには、その市民権を辞書——なかならず節用集——に得たかたわら、ようやく生きた用例もぼつ／＼と現れはじめるものとすれば、とうぜんその現れるのはその根を vulgar tongue にひたしたスタイルの文献においてである。のちに伝来の『意味のモザイク』のその古い構図をあらわに変容せしめた『はなしの文化』のこの新しい伝統は、もと識字階層とは——現実はとにかく——その本質において無縁の世界においてつとにそれ自体ながい生命をみずからに培いきったのであつて、およそ

文献のうわずみにおのれたやすくはその生きた姿を現さなかつたことこそ、しかしながら、それ自体における新しい文化の標識としての一つの意味形態のその自己確立についてじつはその淵源の古さをわれからうかがわしめるゆえんとなる——。すなわち、はなすとは、たゞべちやくちやおしゃべりをするものではなかつた。それは、文字から自由な、ことばそのものの表現を自己目的とする創造のいとなみであつた。“雑談（ザウタン）”とは、たとえば天草本平家物語の序にあからさまなごとく、すでにあなたさまの反省をもつて自覚されたかゝる様式概念としての口語の——具体的にとりうる姿としてさらにいえば、また対談としての——このスタイルのことであつたのだ。

さすがその氣質と教養とのちがいゆえに折口信夫のあの歯どめのきかぬ放埒からは遠いけれども、またときにやはり天馬空を行くの概なきにしもあらぬ柳田国男は、佐竹の引用によれば、冗談の語源を説くにこれを雑談（ゾーダン）に派らしめることで解こうと望んで、もつてそれに臨んでゐるらしい。しかしすでに佐竹みずからやんわりとした言いまわしに借りてじつのところはそれをしりぞけてゐるものとおぼしく、どうもそれはいたゞけぬ。（まず定石

をおもんずるその道のくろうとは、やつぱりやばに頭をかしげるであらう。）しかしながら、さすがにその思いつきは、けつしてそれ自体においてむげに見すてたものにてはまたあらぬ。けだし blending のタームズにおいてなら、かたや饒舌の、かたや雑談の、それぐの味を和えて cook したこのでつちあげが人氣に投じて世におこなわれるに至つたものとも、またあえて contamination のタームズに移していいかえるなら、雑談の形に饒舌が、おのれごまよごしではないけれど、ちよつと藥味を利かした味つけでいつそ舌ざわりよくよごしたでつちあげとも、このようにこじつけてこじつけられぬことはまたあらぬ。それが生きたことばそのもののその生きたいとなみをそれ自体においてそれ自体のためにさながらにこじつけてゐるならば——。たゞしこのような饒舌は、また一向に語源をといふことにはあたひせぬ。語源なぶりに佐竹が警めてゐるゆえんのふくみは、まさにここに係る。

さればよ、それとしてふむべき途（“方法”）はすでにあからさまなだけに、「はなす」の語源（意味の派生）についてのもどかしさは、これも佐竹のすでにふれてゐるところとして、またひとしおである。おのれ、あえてつゝしみを知

らぬにはさらにあらぬものの、いっその一篇の「饒談」
いまさらわるびれずに我意をつらぬいてもうひとことふた
ことを添えてしりぞくのやばに、最後にあらためて宥
恕を江湖に乞わまくののみ。

どのみち咄のこの字のがわからしては意味のミッシン
グ・リンクとよぶべき、すなわち連鎖の鎖として欠けてい
る項そのものの、その修復はほどこしえぬが道理とすれ
ば、いまだ推移のなぞをあざやかにときあかしてくる論
を文献の徴証に具体的にはもとめえぬものの、いまやたと
え靴をへだててではあつても意味論的可能性のタームズに
おいてじつさいに痒いところはどのあたりなのか、せめて
そのあたり、にひとことあたりをつけてみるならば——。そ
のまえにまずあらかじめ注目されるのは、日本語において
「はなれる」の causative には二つの形態のあることであ
る。すなわち、「はなす」と「はなつ」と。そしてそのち
がいたるや、おおづかみに押えるならば、おなじく「使
役」の意味をおびているにもせよ、前者は *to make* のふくみ
における使役であり、後者は *to make* のふくみにおける使
役であるといつてよいであらう。(中世の慣用にたいして
も、ほんこのように言つてあやまりでないと思う。)ここ

においていまわたくしの頭をかすめるのは *Laß mich los!*
(放して!) などと使う——たとえば、譬喩的には *Laß
mich los, denn ich liebe dich nicht mehr!* (すきにさせて
よ、もうあなたのことと思つてないんだもの) とのごとくに
もい、うるはずの——ドイツ語の *«lassens»* である。まず
«los» について一言するならば、たま／＼これはすでに間
投詞的にたとえばこんな文脈においてまた口にははされる
——。「さあみなさんこちらをみて! い、ですか、パチ
リ!」もつと一般的にいえば、*«Fettig! los!»* すなわち
「用意ドン」のドンにあたる。つぎに——、すでにこれは
世にあまたある独和辞典のいずれもおのれおそらくはそ
のおかげをなканずくそれ／＼に蒙つているとい、うべか
しめるたね本、またわたくし一己についていえばかつて招
かれての講義にその草案づくりにさいしつねに坐右にそな
えて重宝した虎のまき、かのドゥデン (*Duden*) の *«Schloß-
terbuch»* (言いまわし辞典、慣用表現辞典) にひとついま
こ、に *«lassen»* については直接こ、ろみにその項にあ
たつてみるに、はたしてまず期待どおりの使いざまとして
〈犬を放す〉が *«den Hund von der Kette l.»* なるはもとよ
り、ついで流俗の慣用として挙げるところ、*«keinen Witz*

じ(しゃれをとばす) および <eine Rede i> (スピーチをぶつ)。ことに「しゃれ」のばあいにつき <zum besten geben> (座興に供する) とパラフレイズしてあるは興味ぶかい。(使用せるは、一九六三年刊、第五板。) 他面これら転用のい、まわしがよそゆきの表現のなかへこれをのぼせることのいとわれるいまだひ、かげもの、そんなぞんざいな、したがって、しかしまた、いわば、さらな感觸のものなりしは、いまだグリムの辞書にはこの慣用にふれるところなきをもつてして窺われる。グリムの辞書の編者たちからその存在をないがしろにされていることは、もしこれを歴史的にみるならば、この転用のつかいざまがその成立においていまだ十九世紀以前にまでは浜らぬあたらしいそば、であることをもこのばあいのおのずから洩らしている。しかるにこれにくらべると、そのかぎりにおいてはもはや日本の「はなす」の方はその成立がやっぱりそんなに新しくないところにさきというところの連鎖の鎖のそのつきとめがたさを帰せしめうる——、つまりいまやこのように言ってもあながちに妄誕のそしりまたあるまじい。けだし、かつてはおなじくなま／＼しかったにちがいないその口語としての語感——いわば、口語における独自の卑俗性

——がこゝにはその跡をとゞめぬまでにすでに失せてしまっているのである。いな、われらフィロローゲの心をいとおしくいらだてじらすゆえんの、このことのもどかしさのそのみなもとは、おのれ陰喩としてやどすべきその表現価値がこゝ、日本の「はなす」にはすでに色あせてしまっている、もと／＼は <loslassen> のこゝろのそのはなすから同音異義へと核分裂をとげてしまっていると、そうアド・ホックに解されるところにもとむべきである。

さて、いまじつさいにその実例を必要とするかぎり、いずれのたぐいの用法についても、それ／＼にそれとしての慣用のその引據をさいわいともに同一の文献にもとめうるというめぐまれたばあい、しかしながらこれをもつてすぐさまそれとしてこゝ、だからそれらすべて同一の共時態のレヴェルに齊しく属する「生きた」もの(慣用)とそのまゝ、たゞちにそう見なすことは、こゝにことわりとしてやはり許されがたいけれども、これから挙げるところについては、いまことあげせるペダンテリーにこだわらずとも経験的によろしかるべく、とにかく太平記のうちから、まず第一にたま／＼犬について「はなす」を用いている例を見いだしうることのたしかである(参照、巻五、「相模入道

……「闘犬事」とともに、つぎのような例をもおなじくこゝにもとめうる。(引用、寛永八年の刊本による。)

何レモ剛あノ者ナリケレバ、死シテ後マデモ互ニ引組ヒツグタル手ヲ不べ放はな、共ニ刀ヲ突立テ……(巻九、「六波羅攻事」)

正成所存ノ如ク敵ヲタバカリ寄セテ、大石ヲ四五十一度ニバツト發はなス。(巻九、「千劔破城軍之事」)

こゝからしてわれ／＼はことわりの趨くところ、(I)手を放すの「を」をある行為・行動のその起点・出発点を含意する助詞と見なしうる。しからば(II)こゝに現実における具体の事態、または事象として、そのかぎりにおいて、(すなわち、陰喩とはかゝわりなく、いわばずばりあなたさまにおいて)石を發はなすとは、手から——さゝえている手をはなせばこゝろがり落ちるべき石をその手から——はなすことにほかならない。おなじくまた、犬を放はなすも、このばあいには、たとえばそれ(犬)をつないであるつなりくさりなりから——この現状からあらたな事態へと——主体のいとなみとしてその現在、すなわちこのいまにおいて放すことを含意する。このパラダイムへ言語の表出のいとなみを移して——メタ (meta-) に運びいへば (vépaw)——と

らえるところの、この、表現における創造の活動へ言語の主体がこゝろをうごかすならば、こゝにことばを(口から)はなすといういゝまわしの実現へのその可能性はすでにひらかれた形であたえられている。

“再建” (das Rekonstruieren, die Rekonstruktion) とは、十九世紀の言語学においては、を利かしたことのひとつである。それだけにその本質や限界についてはE・ヘルマンをはじめ斯界の耆宿たちのその眼をもまたのがれえぬところとなつたこの歴史をおのれ知らぬにはあらぬものの、いまは逆に放埒に、つゝしみぶかい言語学のそのかつて口になかった《文脈の“再建”》へのこゝろみをこゝにひとつあえてするならば、すなわちあらまほしきはたとえば「敵御方迭二悪口ヲ吐イツ雑言ヲ放イツシテ夜ノ白ムヲバ待チタリケリ」とか、「勿閑語——ウツカト閑ラ言バシハナイソノ心」あるいは「ムタトイタツラ言ヲハナシ」ハイヤ、」などといった、まあこんなあれこれの「文脈」にほかならぬであろう。されどしよせん底層の口語は、日向にすがた見せぬ隠り沼ぬのまゝ、を時が移ってしまったいま、もはや再建するによしなく、この昔をいまになげいてもまたいたずらにすぎやるべきか。

さて、ともにその「たて軸」において言語をとらえるの「接近」の、しかしながらその二途として、こゝに通時論と歴史との区別をまず明確にすべしとする立場に執するわたくしとしては、「かたる」「語り」ということばのその連綿たる継承の、たとえば「マテシバシ死出ノ山辺ノ旅ノ道オナジク越エテ浮世語ラン」といった表現にみるところのその絶えざる「再生産」のかたわらに、それに加えて「はなす」「話し」がおのれせりあがつてわりこんできたこの歴史は、どのみちもはや狭義の通時論を超えているとともに、もとく「はなし」は生まるべくして生まれたにちがいないそのかぎりにおいて、それではそれをうながしたそのたましいはなにか――。たゞしかくいえばとて、それは、ある特定の時代の、おのれその社会をうごかすところのそれ自体におけるはたらき、すなわちこのエネルギーにはかならず、なんら形而上学化された超越者をこゝに意味はしない。およそ口からそとへ発するのこゝろがそこにももっているそのかぎりでは、かたるも、はなすも、ともにそれは *utter* であり、また *aussern* である。それは、すでにいえるがごとく、たんに井戸ばたのかしましいおしゃべり、いたずらにとりとめもなきべちゃくちやではない。そ

してそれ自体における即席の座興は、おのれ表現を自己目的としてたくまれた新鮮な *presentation* ないし *Darstellung* となるのである。このいとなみをさゝえるゆえんのものは、語のその根源の意味において因襲から自由の――歴史的にいえば、かたりのマナリズムから自由の――精神であると解される。そしてこれこそ因襲にこだわらぬ民衆のそのたましいのひとえにこれをもとめてやまぬゆえんのものであったはずである。それを目ざしておのれそれなりに独自の文化へみずからを肉体化したところに「はなし」の本質がある――。

かつてH・シュハートののこしたことばに「ことばはその由来をたずねるばかりでなく、ゆくえをも追わなければならぬ」という趣旨のものがあつたが、いまそのひそみにならつてさらにいうならば、はなすことの意としての「動名詞」としての「はなし」から、すでに「もの化」された形としてとらえられる「はなし」の意味へのこの自己展開とそのエネルギーとなつた《はなしの文化》のこの自己確立の歴史を洗うことも、やはり一ついまだ残された課題であろう。

他方、〈はなし〉に置きかえても慣用として通じうる、た

たとえば「そういうことは知らなかった」などというばあい
をふまえて、およそこの意味のその本質にへはなしの
がわから追つてみるこの「接近」は、哲学的解釈学として
の日本語の精神史と、そういう精神史としての認識の現象
学とにひとつ大きな未来を約束してくれるもののようと思
われる。およそ日本にいままで「哲学」がなかったなどお
おけなくもおこがましいことはいわぬけれど、真に日本語
から日本語へ追つた日本語による日本の哲学となると、こ
れははたしてあつたろうか。ヨーロッパにおいて、あくこ
となく、またはてしなくときとかいのちとかといういわば
ざり／＼のことばにかかずらわりつゞけてきた、いな、い
る、この歴史をたとえば思うとき――。

付 言

(I) 標題に「その一」とせるは、これ、初めの予定としては
《か(書)く》の語の成立は「ゑがく」の形が先行せるを
《もつて可能なりしにあらざるの疑問》《杏子》変じて「山
葡萄」となるか》など、できればまだいくつか書きつづつ
もりでいたことに筆者自身としてそのかたみをとめしめ

ておきたい心情または感傷ゆえであつた。

(II) べつにいままでわたくしは《咄》についてなにか一生のう
ちに書くであろうことなどみずからに期待していなかつ
た。そういうふくみからは、いまこの「饒筆」を佐竹昭広
のおかげでおのれ興のおもむくまに／＼ものするに至つた
ことにやはり感謝したい。たゞハナシと訓ずる咄字が吐字
へ浜るのではないかという疑問だけは古い。学窓を巣だつ
ていくばくもない頃、わたくしはかの康遇聖の捷解新語に
うちこんでいた。この第十巻に「おはなしなされ吐(御吐
被成候――原、双行)」とあるこの吐にこだわつたのであ
る。ちなみに捷解新語には日本語の「はなし」が別に三例
みえる。これにたいする訳語^{ワケゴト}は、べつにとくにその意
味をザツダンとは限定しがたい。

さて、「言語」の、かたやおのれ表現のための言語とし
ての、かたやひとえに伝達に奉仕するための言語として
の、この二途性のタームズにおいて、すでに「はなす」が
ほんらい口頭をもつてするの往来、そのための伝達の意味
へおのれ一般化をとげたことは、これまたいうまでもな
い。捷解新語の例にふれたみちすがら、こゝに國內文献に
みるそれに対応すべき徴証から一つをか、げておこう。

其後加賀大納言利家卿病氣重り候二付秀頼公ノ御夏頼
二置ヘキ為ニ大坂ヨリ伏見エ參上内府公工御對面諸夏
被レ成御談シ畢而後……（傍点引用者）

（ちなみに、みぎは内閣文庫本玉滴隱見第一より。もし岩崎文庫本をとれば「諸夏被仰談夏畢テ後……」とあり、これならばこれ自体は「仰セ談ラル、」でしかない。とくにこの異同は「かたる」と「はなす」とがこゝに同義であることをおのずから示してくれておもしろい。）

つぎに、これまたせっかく言っておくが、わたくしの文字への関心は、あれこれいろ／＼もつとほかのことにかまけていて、ために個々の字体や字形を究極の自己目的としうるまでのこのはゞの広さや深さをこゝにつけうるまでのそのような餘力はないにこれを得るのいとまなきまゝ、にうちすぎて老耄にのぞんでしまった。このたびの一篇がその出来ばえにおいていまだあまいところをとめることは、日本の文字のその歴史的研究がいかにやりがいあるしごとなるべきかをこゝにそのまま洩らしている。

Ⅳもと参考にと、あえて本文には引かなかった用例をもふくめて、あわせて資料の原姿を示す写真をせっかくいくつか付載するつもりであった。すなわちその用意までは怠

らなかつたけれども、いっそそこまではよくことにしてしまつたことにも、こゝにひとこと言及だけはしておくこととする。

Ⅳ標題だけから判断するならば語源を論ずるに専らなるかに映るにもかゝらず、じつさいには紙幅のかなりの部分が文字のことに割かれているとの譏りあらば、これについてはあからさまな言いわけはしない。

Ⅴ「咄哉ッタナイ」という例に寓目している。またこれにちなんでいえば、咄字にはすでに沂つてタチの形がその和音であることにも徴証あり、（参考、観智院本類聚名義抄）。

しかしながら、これは一往このたびの一篇にこととするところには係わりうすきことがらと見なし、あえてこゝに絡ませるの煩は避けた。

Ⅵ「咄」に節用集の諸本に「雑談」の注をもつてするゆえんは、はなすというこの語の意味を直接その意味のために——このばあいには——書きくわえたのではなく、すでに「雑談をはなす」という口語の慣用がじつさいにあつてそれをシntagマチックスのタームズにおいて注したものとわたくしはこれをにらむのだけでも、本文においてそれについてふれることはいとつた。いまだ文献にその徴證を

つきとめえぬおのれを慎んだのである。しかしながらさらにいえば、「広言を吐く」などの慣用になぞらえて「雑談をはく」といういゝまわしも許された可能性また否定はしがたい。そして、このような慣用をここに仮定するならば、これも「はなす(話)」の成立にあずかつてそれなりに力があつたかも知れない。ことをな^なという術語で料理してみせるかは二の次のはなし。(このことばの含意をどう受けとるかは、ひとによつておなじかるまじいけれども、それはいまは、わたくしとして、それでいい。けだし、かりにまたいかに甚だしい誤解がここにうまれようとも、それをも他人の所為に——すくなくとも、所為にのみ——帰するつもりはない。かゝる心情の発するゆえんのものをまて追究するいとなみは、もはや科学——*Fachwissenschaft*——の領域を超えた世界に属することも、しかしながらまたあからさまであらう。)

(Ⅷ)従来の線にしたがつて「はなす」をいま他動詞とよぶならば、これにたいする「中動相」の動詞は「はなる」であるが、こゝにそれにつき童子教のうちに、つぎの対句あり、
「觸^{ふれて}事^{こと}不^な違^はレ^ず朋^{とも}、言語^{げんご}不^な得^ずレ^ず離^{はな}」と。たゞし、江戸期にかれこれ必しもその数すくなくからず刊行され

た諺解のたぐいにその施注を検するに、すでに意味の受容まち／＼にしてついに帰するところを知らず、さらにはまたそのうちより一つをこれぞとすぐつてそのまゝ、採りうべき解釈もうた、見いでがたきまに／＼、いまはたんに参考になま^なと本文を掲げるのみにとどめる。しかしながら、言わんと思うことがこみあげてきてついに口をはなれるまで、ひとはそれをいわばあたゝめてはなさないこのうらとして、勢のおもむくところおのずからにまたついにそれはなすのが、ことばのいとなみに適用されるばあいのドイツ語の「*lassen*」という動詞のそのころであることをこゝにあらためて言い添えておくことは、やはりイレレヴァントであるまい。(Trübner, 4. Band のその項、参照。)猶、このついでをもつてこれもひとこととしておくならば、じつさいの用例をその文脈に即してなんと訳そうと——つまりは、言いかえのたくみを弄ほうと——意味論のたちばから抽象するかぎり、ドイツ語の「*lassen*」は日本語の「はなす」と「はなつ」との二つのうちでは「はなす」の方にやはり対応するといいうる——すなわち、そう見なすべきであらう。(だからとて、日本語の「はなす」は「はなす」、ドイツ語の「*lassen*」は「*lassen*」)

もとよりいまは、それ／＼が属するその文化のちがひ、それはきりすて、言っているのである。けだし一定の時代と社会のその歴史的個性の自己表現としての意味は文化の濃密さのその無限に変幻する万華鏡、その一齣々々である。(伽念のためにと、最後にもう一条を樹て、これも言つておくならば、たとえば、てつとりばやく康熙字典に載せるところにいまおんぶすることとして、さて、もと陣字と陳字とは同源、それがのちに二つの別個の字へと分化独立したこと、まず玉篇のみをもつてするもすでにこれこゝにたちにあきらかなれど、いまわたくしにとつてそれはどのみちたんなる『通時論的』事實にすぎない。すなわち、わたくしが本文においてとりあつたところは、すでに二つの別個の漢字として陣字と陳字とがたがひに対立しあつて使われられている後世の段階においてそこに起つた両者のあいだの日本に独自な、こゝろみにわたくしの呼んでもつて癒着とする現象である。(古活字板の三略抄では軍陣の意味の陣を陳とすることはない。これにたいし整板に至ると陣と陳とをとくにきびしく区別せず、すなわち陳を陣のかたわらに並用している。そのかぎりでは陳は陣の異体であるかのごとくにも映ずる。しかし、たとえば新が析の

異体であるばあいとのあいだには、機能のタームズにおいてやはり明確にちがひがあるはずである。けだし、陳と陣とのあいだの交渉は、しよせん癒着のタームズにおいて語らるべきものとして、こゝに優先するところのものは、やはり両字を本来的には別の字であるとするまずこの意識であるはずだからである)。